



GOAT BULLETIN



Laboratory of Animal
Husbandry Resources

第20号

平成20年1月発行

流人の島のヤギ調査



12月上旬に、広岡先生の遺伝資源研究の一環で、畜産草地研究所と北海道農業研究センターの研究者の方々と八丈島へ野生化山羊の遺伝子調査へ行ってきました。八丈島は、羽田から南へ177マイル(約285km、飛行機で45分)離れた人口約8500人、周囲約59kmの小島です。本州との間に式根島や三宅島を挟んでいます。緯度は高知県の室戸岬と同じ位だそうです。住所は東京都八丈島八丈町、車は品川ナンバー、住民は東京都民です。この島のすぐ隣に、昭和44年に無人島となった八丈小島があります。今回調査を行ったのは、この八丈小島で野生化し、のちに捕獲されて八丈島へ連れてこられた山羊の遺伝子です。遺伝子調査といっても、現地で実際に行ったのは「毛むしり」。雌雄あわせて24頭の山羊から採取した『毛』は、今頃DNAが調べられているはずです。

さて、出発前『噂に聞く山羊島の山羊たちは、いったいどんな子達なんだろう』と、わくわくでした。『せっかくだから毛色、角の有無、耳の大きさなど外貌形質の違いも調査してきたらどうか』という広岡先生のアドバイスもあって、山羊のイラストつきの野帳まで準備して出かけましたが、町外れの放牧場で飼育されている山羊を一目見た途端、野帳の意味ははかなくも消え去りました。全頭白一色、有角、立ち耳、一見ザーネンの混ざったシバ山羊です(^_^;)。それでも、『調査団に課せられた任務は毛むしりなのだ!』と気を取り直し、汚れと臭い防御のため、つなぎ&長靴に着替えて山羊達に挑みました。もちろん調査団6名(ひとり遅刻)に課せられた任務は簡単ではありません。広い放牧場で、町役場の獣医さんの助けを借りながら、山羊との追いかっけです。



野生化山羊は、とにかくすばしこいので、なかなか捕まりません。みんなで狭い場所に追い込んであらぬ方向へジャンプして敵の動きを惑わせます。ライオンに追われたインパラを髣髴とさせるような見事な飛びっぷりに調査団も山羊追いに本気になりました。クライマックスは雌のある一頭。あろうことかジャンプの方向を間違えて、I氏の腕の中にすっぽり納まり、ハイ御用。最後にはカウボーイ張りのロープまで登場して何とか最後の一頭まで手中に収めることができました。捕獲した後は、少々『毛』をいただき、各個体の毛が交じり合わないよう別々にジッパー付の袋に密封して、何とかサンプリングを終えました。いやいや相手に不足無しといった感じです。やれやれ。任務を終了した、調査団はこの後も新たなお宝発見のために調査の手を緩めないものであります。八丈島は古くは流人の島だったそうですが、現在はサーフィンやダイビングのスポットとしても有名です。特産品に織物の黄八丈(ものすごく素敵でした)、強烈な臭いを放つクサヤ、明日葉などがあり、島にそびえる八丈富士は風光明媚です。キョンという小さくて可愛い鹿の仲間もいます。久しぶりの野外調査でしたが、現場派の私にとって本当に楽しい調査でした。(ようこ)



八丈島のキョン



目次:

～広岡先生の随筆⑧～	2
山田行雄先生の思い出	
御蔵島で	3
イルカと泳いだ日	
平成19年忘年会	3
バケツの中身	4
オランダ通信③	4
～授業編～	
巷の噂	4
お知らせ	5

昔から、12月は師走(先生も走ります)、1月は行く、2月は逃げるとうよく言います。年末年始はどうしてこんなに忙しいんでしょうね…。今月は、12月のツケで2回飼育当番が回ってきます。山羊たちと触れ合うと、忙しさもほんのちょっと忘れることができ心が和みます。餌やりと掃除が終わって、健康状態を観察する頃には、山羊の至福の時、反芻が始まります。なんて平和なひと時なんでしょう。そこにいる私の気分は、お天気のいい屋下がりの木陰でハンモックに揺られながら風の音を聞いているようです。(なんて思うのは私だけでしょうか?)



小林さんの送別会

2回目の小林さん訪問も残りわずかとなった12月6日、百万遍近くの写楽で送別会をおこないました。冬といえば鍋だろう。ということで、鍋のコースを予約。みんなでおいしく楽しく送別会を行うことができました。そして、今後も小林さんとちくしの絆を深めていきたいと思います。と誓い合ったのでした。



好評連載 広岡先生の随筆

⑧山田行雄先生の思い出<第1編>

最近、大学における教育についての議論が盛んに行われている。その中で特によく耳にするテーマは、講義の方法などの類である。実際、講義こそが大学の教育と考える輩が多い。講義を通していかによく学生に教えるかのノウハウがいつも話題的になる。しかし、私には講義とはある意味で知識の伝達にすぎず、必ずしも教育の本質であるとは思えない。それでは、大学における真の教育とは何なのだろうか。今回は、私の師であった今は亡き山田先生のことを振り返りながら、山田先生の教育(研究も含めて)について語ろうと思う。山田先生をご存知の方が読まれたら、山田先生を思い出していただきたい。また、山田先生のごことはご存知でない多くの方々には、大学における教育とは何なのかを考えながら読んでいただければ幸いである。なお、個人への敬称は、その当時の私から見たものである。

1. 出会い

まず、山田先生の略歴を簡単に紹介しておこう。山田先生は昭和23年に九州大学農学部畜産学科を卒業、昭和26年に佐賀大学講師に就任され、その後、佐賀大学助教授、国立遺伝学研究所室長、後藤卵卵場育種研究室長、畜産試験場育種部長などを勤められた後に、昭和56年春よりわれわれの京都大学農学研究科畜産資源学講座の初代教授として着任された。定年後は、マレーシア農科大学で教鞭をとられ、1997年10月23日に東京都の病院で、72歳で亡くなられた。

最初に山田先生にお会いしたのは、先生の部屋に畜産資源学講座を大学院の進学先に希望している旨を伝えに行った時であった。その時に何の話をされたかははっきりと覚えていないが、熱っぽく研究のことを語られたことと、話の中に英語の専門用語が多数入ったため内容がよく分からなかったことを覚えている。しかし何か分からないが、魅力的な先生であると感じたことは確かである。

2. ヨーロッパ国際学会への同行

私の研究生生活の中で最も山田先生から多くのことを学んだのが、山田先生と同行してヨーロッパの国際会議に参加した時のことであった。ヨーロッパ畜産会議は毎年ヨーロッパのどこかの国で開催されるヨーロッパで最も大きな畜産学に関連する会議である。この会議では、後の研究の流れを決定づけるような重要な研究がしばしば報告されてきた。山田先生は毎年その会議に出席され、新しい知見や情報を得られていた。私は、お願いして自費であったが山田先生と同行させていただいた。

この年の会議はソ連(現ロシア)のレニングラードで開催され、その会議に参加した後、山田先生とともに約2週間にわたってフィンランドのMaijala教授、スウェーデンのRonningen博士、ノルウェーのSkjervold教授、そしてイギリス・エジンバラのHill博士、Robertson博士およびSmith博士の研究室や家に訪問した。家畜育種学を研究している年配の方ならばこれらの研究者の名前を知らない人はいないであろう。今から考えれば、これらそうそうたるメンバーと親交のあった山田先生の偉大さには驚かされる。いずれの場所でも歓迎され、いろいろとお世話になった。山田先生は、これらの研究者に自分の最近発表した論文を紹介され、議論されていたことを今でもはっきり覚えている。

この旅行には合計して100万円近くかかったが、私にとって得たものは非常に大きかった。まず、第一に山田先生と寝食をともにし、多くのことを肌で感じ、身につけたように思われる。物事の見方・考え方、会議での振る舞いや礼儀作法、外国の知人との接し方と議論の仕方、英語の表現法など数え上げたら切りがない。

第二に若くして世界をリードする研究者と接することができた点がある。日本においては、世界の一流といわれる研究者と直接接する機会はそのようなものではないが、この旅行では多くの一流の研究者と会うことができた。もっとも私は山田先生の横で座って議論を聞いていただけであったが、世界を身近に感じることができ、その後の研究活動でも常に世界を意識するようになった。

第三は、国際学会に出席し、世界の研究動向をぼんやりでもつかむことができた点である。この学会には、ヨーロッパ中から多くの研究者が集まってくる。この学会で発表された研究内容は、その後一流の国際雑誌に掲載されるものが多いため、いち早くその後の研究方向を把握することができる。

この学会参加で印象に残っていることは、山田先生は発表者の名前と顔を覚えるために、興味ある発表の発表者の写真を撮るように勧められたことである。日本人の私が、発表者の写真を講演中にパチパチ撮ることは、ある意味で恥かしい思いがしたが、その後に写真を見て発表の内容と講演者の顔が覚えられた事は、後々に非常に役に立った。さらに、私はその10年後にオランダのワーゲニンゲン大学に留学する事になるが、その際にワーゲニンゲン大学を留学先に選択したのは、この会議で見かけたBrascamp博士のことを思い出したからであった。当時、オランダの農業研究センターに所属していたBrascamp博士がバスに乗り込もうとしているのを見て、山田先生が「あれがBrascampという奴なんだ。最初はオレの選抜指数の理論に批判的だったが、いまはオレの選抜指数は重要だと言っているんだ」とおっしゃっていたのを今も脳裏にはっきりと覚えている。その後、Brascamp博士は若くしてワーゲニンゲン大学の教授になられるのであるが、ダンディに髭をはやし、誠実そうだったBrascamp博士の姿を思い出し、ワーゲニンゲン大学を留学先に選ぶことにした。

この旅行の中でもう一つ思い出すが、私が疲れて汽車の中で目を閉じて眠っていると「せっかくの景色なのに見ない奴があるか」とよく言われたことである。何事に対しても知識欲が旺盛であった山田先生の一端を見ることができた。(第2編へ続く)



フィンランドにて(左からMaijala博士、山田先生、著者)



御蔵島でイルカと泳いだ日

御蔵島でイルカと泳いだ！

10月に東京都の御蔵島にイルカウォッチングに行ってきました。動機は、個人的にサルと同様に興味のあるイルカを実際に調査している現場を見てみたいというものでした。今回は初めて海でイルカに出会ったときの話を送ります。



初めての離島だけにまず荷造りで迷いました。事前情報ではバンガローに洗濯機はない、コンセントはない、店が6時くらいに閉まる、とまあ初めてなもので、「ウエットスーツって海パンはくんだっけ？」という低次元な荷造りは手探り状態で進めました。

フェリーに揺られ着いた初日、御蔵島はあいにくの雨。しかしイルカを見るチャンスは少ないので、ウエットとマスクを借り漁船に乗りました。案の定波高は最大で5メートル！（船長談）、USJのアトラクションのように跳ね回る漁船、うねる海面。そんな中でイルカが見つかったと、船長から「12時の方向30メートル！」と号令がかかり、海に飛び込んで必死にイルカを探すのです。

すると向こうから、5頭ほどのイルカ(ミナミハンドウイルカ)が群れを成してやって来ました。互いに絡み合い、親和的な交渉を交わしながらイルカ達は目の前を通り過ぎて行きました。感動の余韻に浸る間もなく、潮に流されないよう必死に泳ぎ、息を切らせて船に上がると、ドドドと駆動音を轟か

せて船はまたイルカの群れを探すのでした。漁船は波間を跳ね回り、慣れない自分にはひどく酔いました。「波の谷間に～命の花が～♪」と兄弟船がアタマの中で流れ、顔面蒼白グロッキー状態、それでも船長の声がかかる度に海に荒々しく飛び込む。その繰り返してましたがイルカはたくさん見られ、とても貴重な経験でした。翌日はお世話になっている鯨類研究者の方々に舟に乗せてもらい、調査を見学しました。しかしここでも酔い倒す自分、情けない…海の男にはなれませんね。今回の経験でイルカの研究に必要なのは、体力、泳力、酔わない精神力、そして細切れにしか観察することのできないイルカの行動や生態をうまく捉える発想力であるのだろうと感じました。滞在中、研究者のMさんご夫妻をはじめ、御蔵島の方々



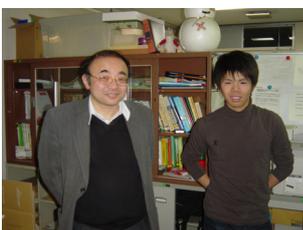
に大変お世話になりました。島の人たちの暖かさを感じ、サルの研究をしていてもまた御蔵島に行きたいと思うような旅でした。そのためにはまず酔い止めを買って、潜水を練習してから。(tazzy)

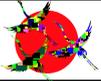
平成19年忘年会！

今年のちくし忘年会は12月14日、廣岡先生に買っていただいた高級お肉で恒例のすき焼きをしました。サイドメニューとしてダイショのお好み焼きも作りました。この日は、田島くんのお友達をゲストにお迎えし、(ゲストなのに)準備を手伝っていただきました。ありがとうございました。

今回は鍋奉行の熊谷先生の不在、ちくしの母(?)の不在という不安材料があり、どうなるのだろうと思っていると…。案の定、すき焼きの味付けなどをめぐって注文が飛び交い、それぞれの食べたいすき焼きについて議論が行われました。結局、鍋奉行として頭角を現した人はおらず、民主的に議論と試行錯誤で乗り切りました。

今年の忘年会は不在の人が多い！ということで、お誘いしたちくし卒業生の上原さんと安松谷さんが途中から合流。久しぶりの再開ということもあり、話に花が咲きました。上原さんってホント高校生みたいにお若いですね(笑)。お二人ともお土産ありがとうございました。





バケツの中身

小学生の頃に、一つ疑問に思っていた事がある。「あのバケツの中身はどこに行くのだろうか？」給食の時間の終わり、子供達が残した食べ物は、いつもバケツのような給食の容器に放り込まれていた。そのバケツには子供達の嫌いなニンジンやピーマン、そしてご飯やスープなど、全てがごっちゃんに混ぜり合い、なんとも言えない臭いを発していた。それを見ていた私は、「もったいないな」という思いと、それ以上の「これはどこに行って、どうなるのだろう？」という疑問を感じていた。15年ほど前の事なので、実際にあのバケツがどうなっていたのかは分からない。

大学院に入り、私も畜産の研究に携わるようになって、食品残渣の家畜利用が盛んに行われている事を知った。飼料用茶殻サイレージやパン耳を利用した養豚など、実際に日本で行われているそれらの研究を耳にし、強く興味を惹きつけられた。私自身も学部時代に「肥育牛に対する竹の飼料利用」についての研究を行い、畜産における未利用資源の可能性を探っていた。毎日のように食卓に並ぶ「肉」の生産の裏側に、そういった試みや努力が積み重ねられているという事実は、初めからそれに対し

ての興味を持っているか、もしくは、外部から知識を与えられる機会が無ければ、なかなか目の当たりにする事は無い。世の中にこれほど大量の食品廃棄物が存在し、多くの人々が、その利用法について試行錯誤をしているという現実。それを知る事は、自らの生活スタイルや考え方も変化させるきっかけとなり得る力を持つだろう。畜産に関わる者の一人として、世の多くの人々にこの事実を知ってもらい、彼らなりにもう一度エゴという言葉について考えて欲しいと願っている。

最近、こういった記事を目にした。

— 給食の食べ残しを豚の飼料にし、育った豚の肉を給食の食材として提供し、「食べる」との意味を考えさせる試みが神奈川県厚木市内の小学校で行われている。家畜など食べ物を生産する現場に触れる経験が乏しい現代っ子だが、「人間はいろいろな命をもらって生きている」などの感想が寄せられ、子供たちの心にも響いているようだ(産経新聞)

彼らは、あの「バケツの中身」がどこに行っているのかを知っている。(椎野特派員)

オランダ通信③～授業編～

今回はワーゲニンゲン大学での授業について書いてみます。ワーゲニンゲン大学は僕が研究している育種の分野では有名な大学で、僕が受講しているのは「Genetic Improvement of Livestock」という修士向けの授業です。

こちらの授業カリキュラムはかなり日本のそれとは異なっていて、授業は基本的に毎日でも4時間くらいあります(ただ、結構休憩タイムがあるのでそんなに時間が長いと感じることはないです)。また、そのうち半分の時間がグループワーク(ケーススタディー)で、少人数のグループを形成して授業で出された問題を一緒に解いていくというシステムになっていました(しかも、次の授業の冒頭で結果を発表させられます!)。こうして書くとは大変だと感じるかもしれませんが、授業の内容を理解するのにとても役立ちます。日本では、授業の内容を掘り下げて理解するための機会を設けた授業はかなり少ないと思うので、こういう形式も取り入れていってもいいんじゃないかな…。また、日本の授業は週に1回しかないので、どうしても前回の授業内容を忘れがちになり、授業内容を理解する妨げになっているのかもしれない。

日本の大学では、修士になればメインは研究をすることで、卒業に必要な授業の単位もかなり少ないですが、ワーゲニンゲンでは修士のメインは授業を受けることで研究はあまりしないそうです(修士の最初の1年以上は授業だけでスケジュールがいっぱいになるため)。どちらのシステムがいいのかはわかりませんが、僕が受けた授業は自身の研究にかなり役立つ内容でした。今まで研究していても根本的なところでわからないところがあって、頭の中でもやもやしていた部分があったのですが、授業を受けて大部分のもやもやが取り除けました。個人的には、日本でも同じような授業があったらいいのにな…。(記者N)

巷の噂

最近山羊達の脱出騒動が頻発しています。『皆さん鍵の掛け忘れには充分ご注意ください!』と思ったら、どうやら犯人は、山羊達自身だという噂が…器用に扉の鍵を明けている山羊を見かけたと言う情報も未確認ながら耳にしました。みんなが寝静まる頃、山羊の縫いぐるみを脱いで『やれやれ、山羊やってんのも楽じゃないよ^^;』と言っているとかいないとか…そんな目撃情報があればGoat Bulletin までスクープしてください!



オランダで販売されているUHT(超高温殺菌)山羊乳。500ml EU R0.95(約160円)だそうです。



ステイ先のリビング(上)↑
寝室(下)↓



Department of Animal Husbandry
Resources, Kyoto University,
Faculty of Agriculture
Oiwakekyo, Kitashirakawa,
Sakyo-ku Kyoto 606-8502 Japan

電話 075(753)6365

FAX 075(753)6365

http://www.animprod.kais.kyoto-u.ac.jp/

GOAT BULLETIN



GOAT BULLETINは、皆様の投稿記事で成り立っています。形式・文字数は問いません。また、読者の方々からのご意見やお問い合わせも受付中です。下記のアドレスまで送信してください。

E-mail: yoko3t@kais.kyoto-u.ac.jp



お知らせ



今月のゼミ

今年のゼミは、1月17日より毎週木曜日に開催されます。今月は、
1月17日(木) 塚原・西尾(文献紹介)
1月24日(木) 菊原・塚原(修士論文発表会練習)
1月31日(木) 金島・西尾(修士論文発表会練習)
の予定です。時間は昨年同様、10:30~12:00、教室はE-503です。
変更等の案内にご注意下さい。

ゼミ係

お誕生日会

1月は、12月に実施できなかった、事務の上原さん(12月11日)のお誕生日会を開催します。お誕生日会のスケジュールは追ってご連絡します。

イベント係



新年会

イベント係では、年が明けて研究室のメンバーが揃ったので、新年会を予定しています。詳細はまだ未定です。皆様からの企画やリクエストを大募集中です。日程の都合等は、近くメールで伺います。

イベント係

研究室の動き

今月は、8日に日本畜産学会要旨締め切りがあります。月末には、修士論文、卒業論文の提出締め切りを迎え、先生方も学生も大忙しです。M1の二人は、そろそろ就職活動本番と言ったところでしょうか。山羊実験と調査(札幌)の予定も入っています。忙しい折、皆さん体調には充分注意してくださいね。

2008年1月の飼育当番表

日	月	火	水	木	金	土
12/30 田端・金島・椎野・竹内	31	1 	2 	3 体重測定	4 金島・児嶋	5
6	7	8	9	10 田端・塚原・西尾 体重測定	11	12
13	14	15	16	17 熊谷先生・長命・菊原 体重測定	18	19
20	21	22	23	24 塚原・西尾・椎野 体重測定	25	26
27	28	29	30	31	2/1	2

編集後記 明けましておめでとうございますm(_ _)m。また、新しい一年の幕が明けました。昨年は、Goat Bulletinも皆様からのご協力を頂いて、何とか毎月発行にこぎつけました。記事ならびにご意見、ご感想を寄せ下さった皆様に、深く感謝申し上げます。平成20年も内容にますます磨きをかけて行きたいと思っています。編集長も当畜産資源学研究室で何とか進学できそうな見込みですので、あと3年間は発行を継続したいと思っています。(内心は、後任の編集長を育成したいと思っています。我こそは!と思う方、是非名乗り出て下さいね)Goat Bulletinでは、今年も皆様からの投稿、叱咤激励、ご質問や意見、お電話、研究室訪問などなど、いつでも大歓迎ですので、じゃんじゃんお寄せ下さい。お待ちしております。